

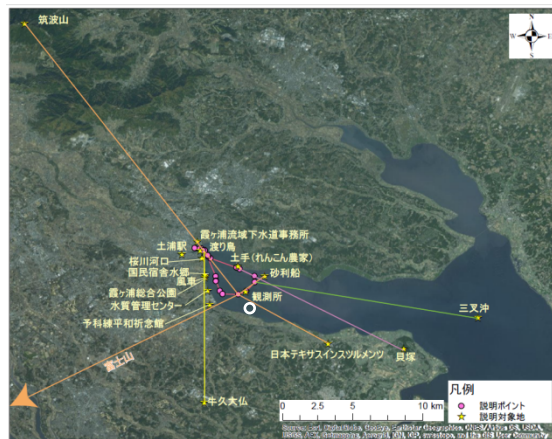
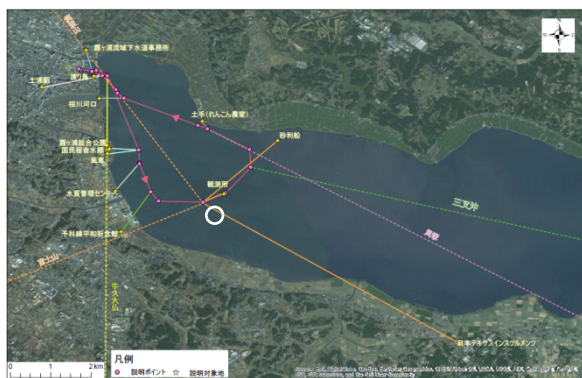
霞ヶ浦および桜川における水辺空間の活用実態に関する研究

松原伽那（地球科学専攻）

1. **目的:** 河川及び湖における水辺空間の活用実態を明らかにすることを目的とする。今回は、観光遊覧船における船内ガイドとその説明対象の空間分布、土手上に整備された遊歩道における土手下への通路の整備状況の分析を行った。
2. **対象地域:** 霞ヶ浦および桜川河口を対象とする。霞ヶ浦では、土浦港から観光遊覧船(3社)が運航しているが、調査時(冬季、平日)運航しているA社の遊覧船(1周 30分)を利用した。また、桜川では、土浦市街との関連を考慮し桜川左岸の河口付近約2.3kmを対象とした。
3. **研究手法:** GPS 端末を用いて、遊覧船では、船内ガイドがなされる箇所をウェイポイントで、説明内容をノートに記録した。同時に、説明対象を写真で記録した。桜川においては、土手上的遊歩道から降りる階段・土手道(本稿では、人が通ることのできた道のことをさす)、および特徴的な設置物をウェイポイントとして記録した。これらのデータを ArcGIS 上で地図化し、分析を行った。

4. **結果・考察:** 観光遊覧船においては、霞ヶ浦畔の建造物等および牛久大仏、筑波山といった遠距離に立地するものが説明対象であった。ほとんどの地点では、その地点から近い対象が説明される一方、第1図中、丸で示した地点においては、多方位に位置する対象に対し説明がなされた。これは、航路中の折り返し地点で最も視界が開けるためと考えられる。説明対象の分布としては、航路の南側、霞ヶ浦畔に多く分布していることが明らかとなった。

桜川においては、上流部では階段が整備され、下流部では土手道が卓越していることがわかる(第2図)。上流部には仮設トイレが設置されており、橋梁数や人口密度の高さから、上流部の回遊性や通行者の存在が整備に影響を与えていると考えられる。下流部では、船に乗るなどの一定の目的を有した土手道がみられ、未整備かつ河口との距離による影響があることがわかる。以上より、対象地域においては、観光資源となる対象や下地があるが、その偏りが顕著であることが明らかとなった。



第1図 A社による霞ヶ浦遊覧の説明対象とその位置関係 (現地調査より作成)



参考：土手道

(2016年2月10日

筆者撮影)

第2図 桜川における土手上遊歩道の整備状況 (国勢調査、現地調査より作成)